日常の希望を積み上げるために

熊本大学　山下裕作

このたびの東日本大震災にて、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。
はからずも命を落とされた多くの方々のご冥福をお祈り申し上げます。
またご家族を失われた方々のご心痛、私には想像も出来ないような大きなご心痛に言葉も見つかりません。

本研究批評の執筆を依頼され、取りかかろうとした明くる日、東日本大震災が起こった。私は昨年４月から熊本に暮らすが、父一人を茨城に残しており、連絡が取れるまで大変に心配だった。会員の方々にも、同じような思いでいた方が多くあったことだろう。幸いにも、父は無事であった。その後、報道される多くの被災地の惨状に目を覆うばかりである。私の家族親族の被害は実に軽微で、私自身も遠く熊本にあって、ほんの僅かですら苦労をともにしてはいない。この震災に関し、私には何も語る資格は無い。しかしながら、この震災はあらゆる方面で大きな画期となるであろう。２０１１年３月１１日の前後では、学問の自覚も目的も方法も、大きく変わっていくものと考えられる。このような時に研究批評を任されておきながら、この現実に目を背けようとすることも、責任を放棄した卑怯な振る舞いであるように思えてならない。本来、私は投機的な人間である。日常に生起するエポックには喜んで便乗する。しかし、今回はとても苦しい。

民俗学における震災に関する経験は、近年であればまず阪神淡路大震災での森栗茂一の活動、そして新潟中越地震を機に２００５年に開催された日本民俗学会の談話会「災害と民俗」、そして昨年（２０１０年）に行われた国立民族学博物館の企画展「歴史と文化を救うー阪神淡路大震災からはじまった被災文化財の支援」などが記憶に残っている。その他にも、国立歴史民俗博物館では開館２０周年記念展示「ドキュメント災害史 1703-2003～地震・噴火・津波、そして復興～」が２００３年に開催され、２００７年には総務省消防庁において「災害伝承データベース」が運用され、また人類学からは、『自然災害と復興支援 』（林勲男著　２０１０　明石書房）が出版されるなど、災害史・災害伝承への成果は各方面から出されている。民俗学内部においても中山薫「災害と講組ー岡山県吉備郡真備町箭田古森地区の場合ー」（『日本民俗学』２２６　２００１年５月）や、各地の郷土誌に不地震地や地滑り地等、災害に関する伝承が取り上げられるなど、目立たないながらも一定度の関心をもって取り上げられてきた。

これまで蓄積されてきた学術活動の整理を通じて、震災・災害の研究を民俗学の俎上に載せることは、必要不可欠な大切な作業である。これまでの議論からも、今回の震災で被害を受けた文化財は相当数にのぼり、その救援にこれから民俗学や民具学が取り組まなければならないことが予測しうる。しかしながら、私はその専門でもなく語る資格を持たない。また、何より、震災被害は今現在眼前で継続中である。いや、熊本で安穏と暮らす私には「眼前」という言葉ですらおこがましい。しかし、遠くで仲間達が苦しんでいる。被災した人々が困っている。家族を失った多くの人々が悲しんでいる。そうした現実がある。私に出来ることはなんであろう。悲惨に悲惨を上塗りするような報道が多いテレビを消して、今この原稿を職場で書いている。何度か職場を往復する車の中で印象的なラジオの報道を耳にした。ふと耳にした報道であるため、詳細はわからない。しかし、激しく胸を打つものであった。

甚大な津波被害にあった岩手県か宮城県沿岸部の避難所での出来事である。泣き崩れていた高齢女性の背をさすりながら、年若い中学生が「おばあさん、僕達が大人になったら、この町を全て元通りにするから、どうか安心して」と励ましていたというのである。

また、別な避難所では、壮年の男性が、もう再建もままならないほど崩れきった故郷を前に、「いつか必ずこの町に戻ってくる。墓を守る者がいなくなったら、皆がさみしがるしゃないか。」と語っていたという。

そして、気仙沼小学校の卒業式では、校長先生が「５年後、１０年後の復興を担うのは皆さんです。復興のため何ができるか、自分たちで考えて下さい」と訓示された。

被災地の復興は容易なことではあるまい。元の土地に町が再建されるかどうかもわからない。防災の観点から、すでに「町ごと移転」という議論が出始めている。また、町の産業の復興にも多くの時間を要するだろう。宮城県沿岸部の水田地帯ではかなりの地盤沈下が生じたと聞く。再び水稲を仕付けるには、干拓を含めた大規模な圃場整備が必要になるだろう。また、福島や宮城、茨城では放射能汚染による農業・漁業被害が長期にわたって継続することも考えられる。

しかし、その町に暮らした人々が再び集まり、自律的に暮らしていくことができれば、住む土地が変わろうが、生計の道が変わろうが、それは元の町なのではないか。震災前にその町で育まれてきた「日常の希望」を再び取り戻すということではないか。それこそが「全て元通り」ということなのではないだろうか。

今は３月１１日に起こった非日常の不幸の中に塗り込められている。実際の生活上の困難の中で、親しい方を失った悲しみに身もだえされている。しかし、亡くなった方々と悲しみ続ける人々を、非日常の不幸の中に置き去りにしてはいけない。確かにその中に暮らしてきたはずの日常の幸福の中に、再びその姿を見出さなければならない。そして、新しく積み上げられるであろう日常の希望の中で、静かに弔い続けなければならない。

そのために民俗学にも為すべき事がある。かつての町の姿を、そこに生きた人々を、培われていた幸福を、私達は被災した人々に語りかけ、その口を開き、語る言葉に耳を傾け、一つ一つ書き記さなければならない。語りかけ、自ら語ることによって、被災した人々は、長い長い時間をかけて積み重ねられてきた日常の幸福の存在を思い出せるかもしれない。それは、今は圧倒的なように見える不幸を凌駕しようとする何らかの動因につながるかもしれない。それは、日々胸の内にあった日常の希望を取り戻すことである。かつてその町にあった日常の希望を、新しく再生しようとする町の日常の希望として伝達継承することである。

もちろん現況を考えるならば、今すぐには無理だろう。急いで命をつながなければならない時に、単なるきれい事としか思えない。しかし、もう少しずつではあるが復興に向けての歩みがはじまっている。再生しようとする町や人々のためになるような「新しい民俗誌」を、復興に向けて大きく踏み出そうとする被災地で、我々は試み、取り組むべきなのではないだろうか。所詮は不出来な学徒の戯言なのかも知れないが、そう思う。

最後になったが、本学会の会員の皆様の中にも被災された方々が多くいらっしゃる。大学・博物館・資料館・図書館、今回の震災により被害をうけた施設も多い。これは研究や教育の危機であり、民俗学そのものが受けた震災被害である。我々被害を受けなかった機関・施設は、この危機を乗り切るためあらゆる努力を尽くさねばならないだろう。特にこれから民俗学を学ぼうとする学生の皆さんには便宜をはかるべきである。なんでも要請して欲しい。私たちも、ともに復興に努めたい。